

# 仙台教区 復興支援活動ニュースレター

## 4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗  
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12  
 カトリック仙台司教区事務局  
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378  
 義援金振替口座：02260-9-2305  
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

仙台市内にあるカトリック八木山教会は、2012年の春から仮設住宅の方々と共に、お花見会をしてこられました。今回は、震災以降3度目のお花見会を、これまでの支援活動の総括の形でまとめていただきました。さらに、山口から福島の本松カトリック幼稚園の支援を続けてくださり、その3年間のまとめをイエズス会の柴田 潔神父様がお書きくださいました。教会と幼稚園が一つとなって支援してくださっています。この方々の活動をご紹介します。

### 津波被災者と共に3度目のお花見会

八木山教会オリーブの会

野田 和雄

亘理町旧館仮設の人々とお花見をするのは、今年で3度目になります。「今年もお花見やりたいネ！！」そんな会話で準備が始まりました。

当日は、協力教会や参加者合計で70名を超える人数になりました。仮設住宅の人々40名を大型バスでエスコートした亘理教会の人々、会場で受け入れ準備を受け持ったホセ神父様と白石教会の人々、そして主催の八木山教会オリーブの会、それを支えてくださった東京・田園調布教会と千葉・五井教会のボランティアの32名です。

全員が白石教会の聖堂でホセ神父様の説明を聞き、信徒館でスケジュールの確認、名札付けを行い、お花見会場の白石城に向かいました。先頭で旗を持って案内するのはホセ神父様です。

当日は、晴天の蔵王連峰の雪と白石城の天守閣の屋根瓦の黒、そして薄紅色の桜が見事にマッチし、満開の桜が私たちを迎えてくれました。

白石市の青年商工会の協力で、場所取り、地酒やビールの追加、熱い豚汁のサービスと白石教会の地元力が活かされました。

花吹雪が舞い、弁当の上や酒の器にも花びらが浮いて、香りと彩りを添えてくれました。参加者は、桜を満喫し、歌い、楽しいお話で盛り上がり、日頃のストレスを発散することが出来たようです。「一生の思い出になる花見になった」と言われた参加者もいました。



この楽しい花見の宴は、三年前、仮設住宅でお茶っこを始めた頃に起こったある出来事がきっかけで始まりました。仮設の方が口々に「外れた、ダメだ」とガッカリした様子でしたので、その理由を聞いてみると次のことがわかりました。

茨城県のボランティア団体が、無料・1泊温泉付き花見バスツアーに招待しますというチラシを配布し、参加者を募集したのです。亘理町の仮設5カ所から3,000人以上の応募がありましたが、無料招待の定員は50名。ほぼ全員が落選し、好意のボランティアが多くの人を落胆を招いてしまったのです。

そこで、オリーブの会は「この仮設住宅だけでも、全員でバスに乗ってお花見に行こう！！」と提案しました。始めは半信半疑だった仮設の人もポスターや申し込み用チラシを見て、集まってきました。そして花見当日は、仮設が空っぽになるほど大勢の方にご参加いただきました。

それからお花見会は恒例行事となり、三年目の今年はホセ神父様から「お花見は、皆さんを私の家に招待します」と言っていたことから、白石教会訪問を兼ねてのお花見となりました。

巨理町では、仮設住宅の空室が増え、仮設住宅の統廃合の噂が出ています。一番先に廃止される予定なのが、私たちの通っている旧館仮設住宅です。ここの住民は、荒浜地区出身で小学生の頃から町内会として結びつきが強く、隣人として震災後も助け合ってきました。

仮設住宅の閉鎖は必ず来る定めですが、巨理・県南地区にはカリタスベースがなく、仮設住宅が閉鎖されると集まる場所が無いというのが現状です。私たちは、お茶っことを続けて欲しいとの要望を受け、現在みんなで集まれる場所を模索しているところです。多くの困難が予想されますが、ホセ神父様はじめ県南4教会へも協力を求めながら活動を続けていきたいと考えています。

来年はお花見会を開催できるのか、それまでオリーブの会は残っているのか全くわかりませんが、今回のお花見の恵みに感謝して、明日からの歩みに活かしていきたいと思えます。

皆様のご支援とお祈りをお願いいたします。



※今回、このお花見会を支援して下さった東京・田園調布教会と千葉・五井教会の方からもお花見会へ参加しての感想をお寄せいただきましたが、紙面の関係上、次号でご紹介させていただきます。



## 二本松カトリック幼稚園との関わり

イエズス会 司祭 柴田 潔

(元 カトリック山口教会 助任司祭 山口天使幼稚園講師)

山口教会と山口天使幼稚園は、この3年間二本松カトリック幼稚園を支援してきました。きっかけは、バザーでした。2011年7月の教会と幼稚園協賛のバザー終了後、その収益をどこに支援したらいいのか私に相談がありました。

バザーは、初めての被災地ボランティア(宮城県塩竈市)の直後でした。私も何か協力したいと、4日間、山に入ってカブトムシを100匹以上捕まえて売り上げに貢献しました。被災の年の父代会長さんは、大きな団体に寄付をしても、いつ何に使われるのかわからないという理由からだと思いますが、「できれば顔の見える支援を子どもたちにしたい」と言われました。

そこで私は、宮城県内のカトリック幼稚園から順番に被害状況を電話で問い合わせ、福島県の二本松カトリック幼稚園に出会いました。佐藤せつ子園長は、初めての電話にもかかわらず、ていねいに現状を話してくださいました。この電話がきっかけで二本松支援が始まり、バザーの収益全額を送金できました。その年は、放射能から守れる砂場小屋、除染費用の一部をプレゼントできました。



砂場に囲いができ、放射線から守られている(二本松幼稚園)

お金の送りっぱなしはよくないと思い、同年11月に二本松を訪問しました。すると園児さんをはじめ思わぬ歓迎を受けました。佐藤園長先生は「もう園を閉じようか…と思った時に山口から支援をいただいてやってこれました」と涙ながらに感謝されていました。

私は園児さんからの歓迎の歌やダンスの後、「二本松と山口はお友だちになれたけど、このまま、バイバイしてもいい？」と聞いてきました。すると「だめ。もっと続けたい」と返事をもらいました。この言葉がきっかけで、クリスマス我慢募金、年末の街頭募金も二本松の支援になりました。

被災の年はクリスマスケーキも諦めようとしていたそうで、喜んでケーキを食べている写真を見て「我慢して良かった！二本松のお友だちに喜んでもらえた！」と心のやりとりが発展しました。

私は、二本松との関わりでたくさんの恵みをいただきました。2011年度の二本松カトリック幼稚園の保護者会長との出会いもその一つです。山口のバザーの様子を知って「お金をポンと出せる人はいるかもしれない。でも、暑い中汗をかいて人のためにできる人は多くない。」とってくださいました。小さなこと、何でもないとおもっても、今大変な目にあっている人には、大きな意味があることが分かりました。そして、福島で暮らしている方の葛藤や故郷を大事にする心を私は学びました。

また、街頭募金をしている写真に心打たれた二本松幼稚園の保護者もいらっしゃいました。「自分と同年の子が声を張り上げてここまでしてくれる。だから辛いけど頑張ろうと思えるようになりました」と感謝の言葉をいただきました。

私は、バザー・募金活動前に保護者あてに目的を話す機会をもらいました。二本松の様子、除染の大変さ、ボランティア先の南相馬の様子を説明してきました。その結果、保護者の間にも、福島の実状、原発問題に関心を持っていただけたのではと思っています。節電目標を決めて献金して下さる保護者もいらっしゃいます。また、教会の人たちも支援の継続を後押ししました。

「1年でプチッと切ってしまうのはどうか？せっかくできた御縁だから大切にしましょう。」と言う意見が出て、2年目からも、バザーの収益、募金の支援先は二本松になっています。2年目は“エアランド・サファリ”という室内遊具をプレゼントできました。

私は、2年目以降も年に数回、二本松を訪問しています。園児さんから力をもらい、様子を山口に戻って報告をしてきました。寄せ書きによるエール交換も続いています。遠く離れているお友だちのために、祈ったり、我慢して募金して応援する優しい心が育っています。山口からは「紙のお金で募金したいからクリスマスプレゼントはなくてもいい」、二本松からは「大きくなったら直接山口に行きましてありがとうと言いたい」このような応援のやりとりが大人の心に響いています。

3年目は、2013年8月“ふっこうのかけ橋”で山口にいらしたシスター熱海とのご縁から、桜の聖母学院幼稚園が支援先に加わりました。年末にはコングレガシオン・ド・ノートルダムの修道院に6名のボランティアが宿泊させていただき、学童保育や宮代仮設での餅つき大会に参加できました。



福島支援の難しさは、「住んでいる方を支援するのか？」「避難している方を支援するのか？」で意見が分かれることです。どちらも応援できればいいのですが、心が矛盾するし、マンパワー的にも難しいところがあります。山口では来ていただく支援“ふっこうのかけ橋”に加わって保養プログラムを実施しましたが、そこが限界です(定期的に大槌ボランティアも実施しているため)。また、福島を支援することは原発という社会問題に踏み込むことになります。私の中では、原発事故は取り返しのつかない事態を招いたので(私は司祭になる前に住宅営業をしていたので余計



にそう感じるのでしょうか)廃止すべきだと結論が出ていますが、そのことを前面に出すと話を聞いてもらえない危険もあります。二本松とのやりとりを通して支援の拡大を訴えています。「未曾有の災害」「再創造」「司教団の原発即廃止メッセージ…。これらの言葉が根付いているのか、私たちは、振り返る必要があると思います。掛け声倒れになってしまうのか、何年、何十年経っても「教会は私たちと共に居てくれた！」と感謝されるのか、日々問われていると思います。「福島の方の隣人でありたい」気持ちを大事にしたいです。